

空色の着物をきた子供

小川未明

青空文庫

なつ ひるす
 夏の昼過ぎでありました。三郎は友だちといっしよに往來
 の上で遊んでいました。するとそこへ、どこからやつてきたもの
 か、一人のじいさんのあめ売りが、天秤棒の両端に二つの
 箱を下げてチャルメラを吹いて通りかかりました。いままで遊び
 に気をとられていた子供らは、目を丸くしてそのじいさんの周
 囲に集まって、片方の箱の上に立てたいろいろの小旗や、不
 思議な人形などに見入ったのです。
 なぜなら、それらは不思議な人形であつて、いままでみな
 みなが見たことがないものばかりでした。人形は新しいもの
 とは思われぬほどに古びていましたけれど、額ぎわを斬られて

血ちの流ながれたのや、また青あおい顔かおをして、口くちから赤あかい炎ほのおを吐はいている女おんなや、また、顔かおが六むつもあるような人にんげん間の気味きみ悪いものものの外ほかに、鳥とりやさるや、ねこなどの顔かおを造つくったものが幾いくつもならんでいたからです。片方かたほうの中なかには、あめが入はいっていると思おもわれました。みんなは、これまで村むらへたびたびやってきたあめ売うりのじいさんを知しっています。しかし、そのじいさんはどうしたか、このごろこなくなりました。そのじいさんの顔かおはよく覚おぼえています。けれど、だれも今日きょうこの村むらにやってきたこのじいさんを知しっているものはなかつたのです。

じいさんはチャルメラを鳴ならしながら、ずんずんと往おう来らいをあちらあらるに歩あるいてゆきました。やがて村むらを出で尽くすと野原のほらになつて、

つぎの村へゆく道がついていました。

「なんだろうね、あの人形は？ 口から血が出ていたよ。僕はあんなすごい人形を見たことがないよ。」と、三郎がいきました。

「僕だって見たことがないよ。あのあめ売りのじいさんは、はじめて見たのだよ。」と、友の一人がいました。

「もつとそばへいってよく見ようか？」と、またほかの一人が、こわいもの見たさにいったのであります。

「ああ、いってみよう。」といって、三郎とその二人がじいさんの後を追いかけてゆきました。こわがってゆかずに往來に止まっていたものもあります。三人は、やがて野原の中をゆくじい

さんに追おいつきました。じいさんは赤あかい色いろの手てぬぐいでほおかむりをしていました。じいさんは知しらぬ顔かおをしてさつきと歩あるいていきます。その後あとから三人にんは、ひそひそと話はなしながら、じいさんの前まえになつてゐる箱はこの上うへをのぞいていますと、突とつ然ぜん、

「このじいさんは人ひとさらいだよ。」と、三人にんの後うしろ方ほうから小聲こゑにいつたものがありました。三人にんはびっくりして後うしろろの方ほうを振ふり向むくと、空色そらいろの着物きものをきた子供こどもが、どこからかついてきました。みなはその子供こどもをまつたく知しらなかつたのです。

「このじいさんは、人ひとさらいかもしれない。」と、その子供こどもは同じことをいいました。これを聞きくと三人にんは頭あたまから水みずをかけられたように凄然ぞつとして逃にげ出だしました。

三郎さぶろうは野原のほらの中なかを駈かけ出だしました。ほかの二人ふたりももときた道みちをもどりましました。すると、だれやら、三郎さぶろうの後あとを追おっかけてきました。三郎さぶろうは自分じぶん独ひとり道みちのない、こんなさびしい野原のほらの中なかへ逃にげたのを後こう悔かいしながら、なおいっしょうけんめいになつて逃にげますと、

「君きみ、もうだいじょうぶだよ。」と、後方うしろから声こゑをかけました。三郎さぶろうは二度どびつくりして振り返かえつてみますと、先刻さつきの空そら色いろの着物きものをきた子供こどもが、自分じぶんの後うしろについてきたのであります。

「ああ君きみかい。僕ぼくは、またじいさんがおいかけてきたのかと思おもつて、いっしょうけんめいに逃にげたよ。」と、三郎さぶろうははじめ安あん心しんしました。けれど、三郎さぶろうはかつて、こんなところへきたこ

とがありませんでした。そして、二人の友だちがあちらへ逃げてしまつて、自分独りでありましたから心細くなつてきました。僕ぼくの家の方うち ほうは、どつちかしらん。」と、四辺あたりを見まわしますと、「あの森もりが、君きみの家のあるところだよ。君きみはあの森もりを見て帰ればゆかれるよ。」と、空色そらいろの着物きものをきた少年しょうねんは教えました。三郎さぶろうは、この少年しょうねんをいままで一度も見たことがなかつたから、

「君きみは、だれだい。」と聞ききました。するとその少年しょうねんは、ちよつと顔かおを赤あからめて、

「僕ぼくは、君きみをとうから知しっているんだよ。」と答こたえました。そして、

「君に、池を教えてあげよう。」といつて、三郎をあちらにつれてゆきました。すると、そこに池がありました。三郎は、この野原の中にこんな池のあることをはじめて知りました。ちょうど日が暮れかかつて夕焼けの赤い雲が静かな池の水の上に映っていました。池の周囲には美しい花が、白・黄・紫に咲いていました。

そのとき、少年は足もとにあつた小石を拾つて、水の上に映つていた夕焼けの紅い雲に向かつて投げますと、静かな池の面にはたちまちさざなみが起こつて、夕焼けの雲の影を乱しました。しかして、それが、静まつたときに、その真つ青な水の面には、少年の白い顔がありありと映つて、じつと三郎の顔を見つ

めて、音おとなく笑わらったかと思おもうと、たちまち消きえてしまいました。

三さぶろう郎らうは、怪あやしんで、四あたり辺みを見みまわしましたけれど、空そらいろ色の着き物ものをきた少しょうねん年すの姿すがたはどこにもなかつたのです。三さぶろう郎らうは、森も影りかげを目めあてに、その日ひは家うちへ帰かえりました。

あくる日ひから、日ひぐ暮がたれ方がたになつて夕ゆうや焼やけが西にしの空そらいろを彩いろどるところになると、三さぶろう郎らうは野のの方ほうへと憧あこがれて、友ともだちの群むれから離はなれてゆきました。ある日ひのこと、彼かれはついに家うちへ帰かえつてきませんので、村むらじゆうのものが出て探さがしますと、三さぶろう郎らうは野のの中なかの池いけのすみに浮うき上あがつて死しんでいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

※表題は底本では、「空色《そらいろ》の着物《きもの》をきた子供《こども》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：富田倫生

2012年5月23日作成

2012年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

空色の着物をきた子供

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>